

Sense and Sensibility

——時代精神と女達の価値観——

平 井 雅 子

Jane Austen は1775年に生れ、1817年に死亡したが、その間、出版された小説は四作——*Sense and Sensibility* (1811)、*Pride and Prejudice* (1813)、*Mansfield Park* (1814)、*Emma* (1816)——であり、死後出版された二作 *Northanger Abbey* と *Persuasion* と共に、幾度も書き直されて次第に洗練された独特の文体を生み、それによって Austen は、やがて英國文学を代表する一人として後世の小説に多大な影響を与える形式を確立したのである。ことに、最近になって出版された *Lady Susan* という書簡形式の短い小説や、その他の断片が物語るように、また *Sense and Sensibility* そのものが当初、その頃流行していた sentimental novels (感傷小説) への諷刺、パロディという彼女の習作時代の意識から出発し、幾度もの書き直しを経て、なお幾分その色彩をとどめているように、その少女時代からの Austen の一連の著作と書き直しの過程は、18世紀の小説の模倣から脱皮、新しい小説の形式へと生まれ変わる歴史であったという事が出来る。

だからこそ Ian Watt は、わずか11頁の簡潔明瞭な *Sense and Sensibility* 論¹⁾ の半分以上を英國小説（ならびに文学）の歴史の概観と、そこにおける Austen の位置づけに費しているのだが、その中でことに Watt は 2 頁をさいて17世紀の Hobbes, Locke 以来の人間観の変化（個人は自己の利益のみを追求するものという、いわゆる性悪説や、生来、人間は何の道徳的感情も判断力も持たないとする tabula rasa の理論）、これに対抗する Shaftesbury, Hutcheson を中心とする感情論、感性論、倫理的人間観を概観し、こうした思

想が文学の中に取り入れられ、Henry Mackenzie の *Man of Feeling* (1771) や Laurence Sterne の *The Sentimental Journey* (1768) 等と共に、さらに多数の sentimental novels と呼ばれる大衆小説のジャンルを生み出す過程を論じている。Everett Zimmerman²⁾ もまた、18世紀末のいわゆる “sensibility” (感性論) の信奉者達が、Shaftesbury をその最も影響力のあるスポーツマンとする倫理思想の伝統を拠りどころに、その思想を展開したと述べ、そもそも Shaftesbury にあって正当な行為の導き手となる emotion (感情) は、一方では public good (公的善)、他方では private good (個人的善) をもたらす、それぞれの部分を有し、個人と社会は共存可能 (compatible) と考えられた事を強調。その上で、Austen の一見、保守的な社会慣習順守の姿勢を支持するかのごときストーリーの展開の裏に、実は個人には社会に絶対、侵されてはならない core (核の部分) があるという意識、すなわち或る程度、社会と個人は共存不可能 (incompatible) と考えたふしがある、と指摘している。こうした両者の論調、なかんずく、その力点の置き方の意味については後程、考える事にして、まず、そうした流れの社会的背景について、ざっと考えてみる事にする。

18世紀の英国は産業革命によって促進される土地経済から貨幣経済への移行、市民階級の勃興、個人の自由（と、それがはらむ危険）の増大、という流動的、過渡的状況の中で、いわば一人一人の人間の価値を測り、個人の生き方を支える新しい物さしが模索された時代である。その中で、例えば a man of taste (趣味判断を有する人物)、a man of sensibility (感受性情緒能力に富む人物) といった gentleman の理想像が、なかば趣味的、なかば精神的価値観として、教育および社交の場で確立されていった。それは、しかし一方では金銭欲、物質主義に支配される事を免れない上・中流階級の自己正当化の手段、名目として、また他方では、こうした社会の趨勢への反発、個人の自由の表現として用いられた。さらに、後者の意味での個人の価値観の追求が、社会から独立した絶対的価値ないし規範となる、言わばロマン主義あるいは前ロマン主義に至る過程の中で、個人の価値の追求は社会の現実との軋轢と個人の犠牲をも

たらし、こうした犠牲を人々の sensibility, sympathy, imagination に訴える対象として誇示する sentimental novels (感傷小説) の抬頭がみられる。そのストーリーの多くは、一人の純真無垢な未婚の女性が、その体と共に心の純潔を守ろうとして（すなわち世俗的結婚などの身を守る術を放棄する事により）物質主義的、世俗的価値観の支配する社会にはんろうされ、身の破滅をみるというものである。このように、当時の社会に現実に生きる人々の活動や意識も、また、これを反映し敏感に反応する大衆小説の流れも、一部の知識人思想家以上に、そして或る意味でさらに自由に種々の概念を操り、時代精神を形づくっていったのである。それは、紛れもない堕落や乱用という側面をもちながら、反面、その中から何かしら新しいものをも生み出していったように思われる。

18世紀末、sentimental novels の全盛期を目のあたりにした Jane Austen の小説が正真正銘、19世紀の小説として読まれ、彼女がそこから多くを学びとったと思われるそれまでの作品群とともにを分かつと見なされるのは、こうした風潮の中での sensibility その他の概念の操られ方に対し、Austen が痛烈な批判、諷刺を行ったためであると考えられる。彼女の批判は、その習作時代の作品の中には最も明瞭な sentimental novels のパロディとなって表れ、最初に出版された *Sense and Sensibility* では、まさに sensibility を具現する一人のヒロイン Marianne が世間的通念や礼節、実際的、物質的配慮を無視し、自己の価値観と taste (趣味判断) のみを追求するあまり、物事の（ことに相手の男性の）本質を見失う。Marianne が本人および周囲の人間の不幸、社会的であると同時に人間的、精神的破滅をも招くという最悪の結末から、かろうじて逃れるのは、sense (社会とのバランスをはかる理性的判断、思慮、分別) を具現するもう一人のヒロイン Elinor によって助けられるからである。Austen が反ロマン主義、リアリストとされ、言わゆる common sense という意味での sense とのバランスの中に個人の価値を求める意味で Ian Watt が彼女を classicist (古典主義者) と評する由縁である。

しかし一見、明瞭とみえる Austen の立場も、Tony Tanner³⁾ らが指摘する

ように、この小説をじっくり読めば決して単純ではない。読者は、Marianne の自己中心的情熱、自己の価値観とする taste と imagination の追求に、その抑制のない誇張された sensibility の表現に苛立つと同時に、いつも自己の感情を抑えて冷静な観察と判断、周囲への配慮を怠らない Elinor の sense に対しても、それが、しばしば本質的問題の解決につながらないばかりか、彼女自身の人間性を縛り、感情のみが判断すらも停止させてしまうのに、言い知れぬ噴りを感じる。言わば sense もまた、sensibility に劣らず、アイロニーをもって描かれるに至るのである。Marianne の恋人 Willoughby の裏切りと彼女の激しい失望（彼を失った事以上に、彼女が自分の価値観に従って思い描いた彼のイメージが崩れる事に耐えられないのだと、彼女は告白する）から、ついに病いに倒れ狂気と死の縁をさまよう Marianne の叫び、そして全人格の変貌に等しい sense への開眼と服従という＜治癒＞に対しても、読者は、Tony Tanner の言葉を借りれば “something valuable has been lost”（何か貴重なものが失われた）と、感じるのである。それは、あたかも E. M. Forster の小説 *Howards End* の中で、気儘勝手に夢を追う愛すべき Helen の精神主義、反物質主義の言動が、やがて狂気じみてくるのに当惑し、不安を募らせながらも、突然、その＜治癒＞と冷静沈着な分別を目にした時の Margaret が感じるような、いわく言い難い失望と無念さである。私が繰り返し「読者は」という表現を用いたように、Austen 自身は作品の中で、そうした明確な示唆を行わず、その登場人物は、自らの行動や言葉の蔭に隠れた曖昧でひそかな想いについては、その抑制という形でしか多くを語らない。それでも読者は Austen の辛刺かつ複雑なアイロニーと、登場人物の人間性に注がれた愛と痛恨、半ば諦観にも似たやり切れぬ想いのひだの中から、それを感じとらざるを得ない。

さらに、そもそも Elinor と Marianne の二人は、細かい差異はあってもおよその taste と sensibility、さらに或る程度の sense さえ共有する姉妹である事も、Tanner の指摘する通りである。だからこそ、彼女らの遺産相続をめぐる兄夫婦の物欲に縛られたけちで冷淡な態度や、表面的 elegance（優雅な品の良

さ）のみにこだわって自分の子供の事以外、語るべき話題をもたない Lady Middleton の内容の無さ、若い男女のゴシップを事とする好奇心旺盛な Mrs. Jennings の低俗さ、など周囲の人々に対する判断を共にし (Elinor は、人の判断はそれだけではできないとしながらも)、およそ物事の金銭的判断には縁遠い情愛豊かな彼女らの母親 (Mrs. Dashwood) を愛し、互いの恋人となる男性の中に彼女らの愛に対応する good sense (Elinor の相手 Edward Ferrars の場合) と sensibility, taste (Marianne の相手 Willoughby の場合) を多少とも認めて、姉や妹の恋愛の成就を願うのだし、互いの価値判断の動搖と変化を伴うストーリーの展開を経ても、最終的に理解し合えるのだと考えられる。もし、彼女らのどちらかに sensibility が欠如していたら、また、根底のところで Austen が sensibility を肯定していなければ、この小説は成り立たないとも言える。

こう考えると、あらためて sensibility とは何か、sense とは何か、という問題がこの小説の要とも思われてくる。その問題をぬきにして、Austen が sense を重視するか、sensibility を重んじるかを論議するのが愚かであるばかりでなく、この小説の核心は、まさにその問題を問うことにあったのではないか。結論的に Ian Watt は Austen を “Romantic” でなく “classical” であると評し⁴、逆に Tony Tanner が、“a full exploration of sensibility” (sensibility の完全な探求) を成し遂げた George Eliot や、“individual passion” (個人の情熱) の前に社会構造すら崩壊しうる事を示した Emily Brontë らの先駆者として Austen を位置づけた⁵としても、彼らは共に Austen の中に、彼女の時代を特徴づけた相反する二つの精神の葛藤と、そこに生ずる曖昧さをみている。Watt によれば、

The primary importance of *Sense and Sensibility* in the history of the novel —and for us—is that in it Jane Austen developed for the first time a narrative form which fully articulated the

conflict between the contrary tendencies of her age; between reason and rapture, between the observing mind and the feeling heart, between being sensible and being sensitive. (Watt, 50—51)

小説の歴史における——そして我々読者にとっての——*Sense and Sensibility* の第一の重要性は、Austen が彼女の時代の相反する精神の流れ、その葛藤に完全な表現を与える語りの形式を最初にこの作品で生み出したという点である。理性と狂喜、観察力に優れた知性と感情豊かな心、合理的の判断に優れる事と感受性に富む事。

この批評文の中の sensible, sensitive, sensibility といった言葉をみても、それら全てが sense という言葉から発している事、ことに20世紀の我々にとっての意味理解の難しさが感じられる。実際、前述のように Watt は Shaftesbury や Hatcheson における benevolence (善と慈愛の心)、sensibility, moral sense の概念を基本に、彼らが対立した、それ以前の Hobbes や Locke の非社会的利己的或いは白紙的人間観、さらにルネサンスにおける感情と理性の分離 (T. S. Eliot の言うところの “the dissociation of sensibility”) にまで遡って概念の由来を述べ、一方、Shaftesbury らの性善説が引き起こした政治的意味 (Rousseau やフランス革命に及ぶ) と美学的、文学的意味 (自然と芸術に対する強烈な愛が一般に個人の道徳的優越性の目安となる)、その帰結としてのロマン主義運動における “sensibility” の概念の重要性を指摘している。しかし小説においては、その市民階級に受け入れられた発生からして詩のように社会から独立した純粋な自然や美の世界を形づくる事は不可能と思われ、逆に、社会と個人との葛藤こそが、小説の中心的テーマになったと考えられる。sentimental novels の段階では、単に sensibility のみによって立つ情熱的ヒロインが真っ向うから社会と対立する単純で未熟な図式が試みられるが、より成熟した作家 Austen によって、やがて個人の中に葛藤の図式が持ちこまれ、言わば個人の中に社会と個人が存在する事になるのは必然的流れであった。

Elinor と Marianne は、二人の別個の人格であるという意味では sentimental novel と同じ単純な対立の図式を提示しているようにみえながら、姉妹であり多くの共通点と共感を分かつが故に、劇的イメージとしては、一人の個人の中の社会と個人、sense と sensibility の葛藤に似た状況を作り出す。ことに、この姉妹の親密さと互いへの影響力、互いの命運が相手を巻きこみ、その運命をも変えざるを得ないが故に、sense と sensibility の意味そのものも、また問い合わせられ、変わっていかざるを得ないであろう。

物語の冒頭、もし、これが sentimental novel であったなら、sense と sensibility の対立の図式は、Marianne と異母兄 John Dashwood 夫妻との対立になる事が予想される。彼は、やや冷淡な心の持ち主だが、通常の義務を執行するのに “propriety”（分別ある妥当性）をもってする事から一般に世間では敬意を払われる人物で通っており、彼の妻は彼に輪をかけた冷淡な計算高い人間である。彼が父親の死に際の頼みを聞き入れて妹達に1000ポンドずつの遺産を分けてやろうと内心、自己の寛大さに気をよくして考えた時（というのも、父親自体には残すべき財産もなく、John は母親の遺産を相続した上に、今度は父親の叔父の遺産を、その気紛れで自分の4才の息子に遺される事になったためだが）でさえ、次のようにもっともらしく sense を盾にする妻の議論に簡単に屈して、ついには一文も妹達や繼母には渡さぬ事にするからである。

... ten to one but he [John's father] was light-headed at the time. Had he been in his right senses, he could not have thought of such a thing as begging you to give away half your fortune from your own child. (*Sense and Sensibility*, 43–44)

…そりゃあもう、お父様はその時、頭がぼけてらしたに違いありませんわ。もし、その時、正氣でいらしたら、貴方に、貴方の財産の半分を自分の息子から取り上げよ、とせがまれるなんて、考えられませんもの。

ここでは sense (理性、分別) は、話し手の都合のよいように、その利己的所有欲を世間的一般的妥当性として通用させるための手段、口実となっており、その議論の危うさにも関わらず、聞き手の心に本来、巣食っている利己的欲求に訴えるが故に、容易にこれを妥当なものとして受け容れさせてしまうのである。だが、Elinor を特徴づける sense は、このようなご都合主義、世間向けの理屈ではなく、“strength of understanding, and coolness of judgment”（優れた理解力と冷静な判断力）と描かれる、独立した強烈な個性である。また、当の John Dashwood ですら、もし、もっと “amiable”（情があって人に好かれる）な妻と結婚していたなら、もっと尊敬される人物になったかも知れない、ひょっとしたら彼自身、“amiable” になったかも知れない、というアンダー・ステイトメントに示されるように、周囲の状況と人間関係によって人間性を作られもし損われもする弱い一個人としての側面をまじえて描かれる。そこが sentimental novels とは異なるのである。

Marianne その人は “amiable” であるが、単にそれだけにとどまらず（姉妹の母親 Mrs. Dashwood は、それにとどまるとも言えるが）、“sensible and clever; but eager in everything; her sorrows, her joys, could have no moderation”（磨かれた感性を持ち機知に富み、但し何事にも熱中し、その悲しみも喜びも程度というものを知らなかった）とある。これを強烈な個性と呼べるかどうか、現代人としてはためらうところである。単に “moderation”（程度、節度）を知らないというだけで、それ自体価値あるものとなるのか。磨かれた感性というが、それは何かと言えば、Wordsworth や Cowper を朗読するには、当然、熱くなって読まずにいられぬ筈であるのに、ただ淡々と読む事のできる Edward Ferrars は sensibility に欠ける、と頭から非難したり、“What a pity it is, Elinor... that Edward should have no taste for drawing” (53) と、絵の才能のある姉に向かって、その才能を評価し分かち合う “taste”（趣味判断力）の無い男性を恋人を持つ不幸を憐れんだりするのに用いられる程度のものとも言える。つまり、それは、自分の趣味判断と異なる時に、否定的な形

でだけ發揮されるようなもので、そんな Marianne が、この世の中には自分の愛せるような男性はいないと思う、と述懐していたところに Willoughby が現れる。彼は、その魅力的な容姿、服装（彼らの出会いの時、彼が着ていたハンティング・ジャケットは最も雄々しく見える服装である事を Marianne は発見する）と、彼女の趣味主張にことごとく同調する事、そして周りを意に介さず思う存分、情熱的な好き嫌いの表現を行う事で、言わば彼女の分身のごとく Marianne の心をとらえるのである。影以上の存在とは思えぬ Willoughby が、しかし、やがて Marianne を生死の境においやるほど彼女の心をとらえるのは、そもそも Marianne の価値観とする taste ないし sensibility そのものが、相対的な影のごときものにすぎなかった事を暗示しているのではあるまいか。相対的とは、或る個人の sensibility が別の個人の sensibility に対し相対的であるというばかりでなく、社会の現実、Marianne が軽視し、軽蔑してやまない世間の評価や慣習、金銭勘定などに対しても相対的ではないのか。あるいは、それが決して相対的ではないと、自らの絶対性を頭から決めてかかっている時に、却って、その独立の基盤さえ失う单なる盲目の影へと転落するのではないか。これは単なる推理であり、必ずしもそうなるとも言いきれないのも現実かも知れないのだが、小説では Willoughby は現実に金銭勘定に足をすくわれて愛してもいい金持ちの女性と結婚して、後にその失敗を嘆き、Marianne は絶対視していた Willoughby のイメージの崩壊と共に、自らの sensibility の崩壊を味わうことになる。彼女の破滅——もし、そう呼んでよければ——は、自らの sensibility を打ち消し、破壊するような相手を想定しなかったところに発している。それが、自分と異なる sensibility の存在であれば、もっと良かったかも知れないが。少くとも、次に発表された小説 *Pride and Prejudice* (『自負と偏見』) には、solipsism (自己絶対視主義) の破壊の積極的主題が展開されてゆく。その意味で、Austen の中で *Sense and Sensibility* は過渡的役割を果たす小説でもある。

しかし Elinor の方は、首尾一貫した分別によって余りにも自己の感情を抑

えすぎる気配があるとはいへ、物語展開の重要な節々で、いつも異なる感情の板ばさみとなり、時には Marianne より自分の方が憐れまれるべき状況にあると感じてみたり、あるいは、妹の身に不幸がふりかかると、自分の方はそれに比べてまだましだ、自分の悲しみは世間の誰にも知られておらず、しかも自分とは永遠に隔てられるらしい Edward その人には、何ら責められるべき本質的な落度はないのだから、と考えたりする。或る意味で人間的な弱味というか、妹の損失と比較計算をして慰められたりするようなところが、姉としての彼女の責任感や無私にも似た深い愛情に織り合わさせて出てくるところに、何かしらおかしくなり、ほっとさせられるようなものがある。Lucy Steele と Elinor の Edward をめぐる恋のつば競り合いの舌戦は、そのような彼女の sense の活気が最も表れる部分ではないかと思う。表面的には、あくまで社会的慣習、礼儀正しいマナーと相手の女性の幸せを願う配慮を欠かさぬようでありながら、決して、必要以上に自分のこれからとの言動を縛るような言質をとられたりしない。自分と Edward の関係や自分の心の中を Lucy が見ぬく手助けなどしてやるものか、という意気込み。外見的には全て相手 Lucy の方が Edward との関係で有利に立っているようにみえながら（Lucy によれば彼らは婚約しているのだから）、Elinor は Lucy と話せば話すほど、Edward の心は既に Lucy を離れ、自分のものであるという事を確信し、その勝利感に身ぶるいする様子が伝わってくる。しかし同時に Elinor は、Lucy がうそについていない事、現実には Edward が、若気の恋の約束にどうしようもなく縛られている事実を認識するのである。

Elinor の限界は、この認識を破れないところにある。すなわち、あまりに冷静な判断力と鋭い観察、周到な配慮、そして認識に到達する彼女は、その認識そのものに縛られて、身動きできなくなる。その外、あるいはその上の事を考えられなくなるのである。再び、現代人にとってもどかしいのは、理性は理性を乗りこえ、認識は認識を破壊するところに眞の姿と発展が見られるのではないか、という事だろう。若気のいたりの婚約が、一度した約束を破る事は相手

を傷つける事になり、自己の一貫性、信憑性を、人間としての誇りを失くす事であるという意識が Edward と Elinor を別々に縛る。Elinor には Edward に見えないもう一つの真実、Lucy がただ人に取り入る事が上手だが軽薄で教養のない、真実の情も無い嫉妬深い女性であることが見えているにも関わらずである。この相手の女性の欠点を男性に教えたりは決してしない品の良さと高い誇りとが、Elinor を縛り、かつ彼女を支えている。この pride (誇り) こそ、さらに *Pride and Prejudice* の中で Austen が明確に取り組む事になるもう一つの障害なのだが、*Sense and Sensibility* では、それが危く崩れかかり、Elinor の人格の殻が破れかかる、という場面が小説の終り近くになって登場する。

その場面は二つ。一つは、Lucy の馬車に出会った召使いから、彼女が Edward と結婚した事を聞かされた時。彼らが遠からず結婚する事を予期し、その前提となる職探しの手助けまでした Elinor が、現実に、不意に彼らの結婚の＜事実＞に接した時、その衝撃で我を忘れ蒼白となる。初めて母親や妹に、Elinor の深い想いが知れる場面である。第二は、Edward が突然、自分の弟が Lucy と結婚したので（Edward の方は、財産も無い女との婚約を貫こうとして母の逆鱗に触れ、財産相続権を奪われるが、弟は母に気に入られて財産をもらい独立した、それが原因と思われる）、自分は自由になった、と告げに来た時である。Elinor は、もはや坐ったままではおれず、ほとんど部屋から走り出さんばかりにして、Edward がドアを閉めて出て行った途端、堰を切って喜びの涙が溢れ出した、という。つまり彼女は、本質的には自ら手を下して障害となる誇り、ないしは sense を破壊する事なく、おのずと障害となる事実の方が取り除かれたので、その必要も——或いは、もう一つの可能性としての人間性崩壊、狂気も——無くなったのだが、極しさやかな自らの破壊行為として、しゅく女としてのたしなみの sense を破る、ほとんど破りそうになるのである。Elinor は、Marianne よりも本来、数段、面白い人物であるにも関わらず、その意味では、Marianne のように人目もはばからず嗚咽したり病に倒れたり、狂気に陥る事もない。激しく動搖しつつ殻を破る手前で終ることになる。

それでも、姉妹それぞれの動搖は、小説の登場人物の価値と価値観を左右する。無趣味で感性に乏しく、Marianne に嫌われていた Colonel Brandon が、世間を知るゆえに Marianne の sensibility、その無垢で無責任な若々しさの失われる事を嘆き、それを守ろうとするひたむきさは、ついに彼女の夫となり、愛されるという形で報われる。だが、本当のところ、もっと重要なのは Mrs. Jennings の場合であろう。当初、品が悪くお節介なばかりに見えていた Mrs. Jennings は、Marianne や Elinor、Edward らの困難に際して、頑固にその肩をもち面倒をみる人情のあつさを表し、Marianne が悲しみを乗り超えるためのアドバイス、

One shoulder of mutton, you know, drives another down. (207)

羊の肩肉を呑み下すには、もう一切れ、羊の肩肉を食べるに限るのよ。(すなわち、Willoughby にすてられた彼女の悲しみは、Colonel Brandon と結婚すれば癒える。)

という、ひどく俗悪で無粋な言い回しすら、ついには sensibility 本来の意味を表す表現のようにすら思われてくる。羊の肩肉はしつこい食物であり味(taste)を有し、性的意味を合わせ持つが、やがて、それだけではない何かに変質し、姉妹の心をとらえる Mrs. Jennings 独特の人情と活気に満ちた sensibility のイメージになる、と言っても過言ではない。それは、taste であって趣味判断を超え、感性であって感性を超え、市民社会の活力をまるごと呑みこんだ＜何か＞である。

注

- 1) C. f. Ian Watt, "On Sense and Sensibility", *Jane Austen : A Collection of Critical Essays* (Englewood Cliffs, N. J. : Prentice Hall, 1963), 41-5.
- 2) Everett Zimmerman, "Admiring Pope no more than is proper: Sense and Sensibility," *Jane Austen : Bicentenary Essays*, ed. John Halperin (Camb. Univ.

Sense and Sensibility

Press, 1975).

- 3) C. f. Tony Tanner, *Jane Austen* (London : Macmillan, 1986).
- 4) Watt, 50.
- 5) Tanner, "Introduction" to *Sense and Sensibility* by Jane Austen (London: Penguin Books, 1969), 32–33.

[本稿は神戸女学院大学女性学インスティチュート1992年度研究助成金による研究成果である。]

Summary

Sense and Sensibility:

The Spirit of the Age and the Ideas of Austen's Women

Masako Hirai

Is Jane Austen a moral conservative? Is she a romantic or a classicist? Critics' opinions are divided, especially with the recent emphasis on some ambiguous and disturbing implications in the text. It is more fruitful to ask such questions in the context of what was happening in the history of thought and also in the history of the Novel from the eighteenth century to the early nineteenth century.

Especially with Austen's *Sense and Sensibility*, it is important to study the history of the ideas behind the title. The concept of "sensibility" developed in the general atmosphere of the aesthetic thought of Shaftesbury and Hutcheson, with the emphasis on man's sensitivity, feelings and resulting humanistic moral sense, against the more socially deterministic view of Hobbes and Locke who did not believe in the natural goodness and moral judgment of man. Why the idea of "sensibility" became popular in the middle-class society, which sought gentleman's ideals (man of taste, man of sensibility, etc.), can be explained both from the wish of the rising middle-class people to find self-identity and from their need to justify their otherwise profit-seeking, self-centred actions and turn of mind.

In literature, while the idea of "sensibility" became genuinely important

in the formation of romantic poetry, it also became influential as a more controversial, possibly corrupt, popular sentiment in what are called "sentimental novels". Though in Richardson's novels themselves the heroine's moral judgment against the corruptive environment was important by itself, the pattern alone of the *martyred* young heroine, who, being pure, defies the evil social forces and is painfully violated and destroyed by them, prevailed in those sentimental novels. The popular fiction, with its tendency for repetition, exaggeration and melo-drama, however, reflects keenly the dilemma of fiction which from its middle-class origin and readership always stood between the individual passion and the social reality, between "sensibility" and "sense".

Austen's early works developed as a parody of the sentimental novels. The story of *Sense and Sensibility*, too, is basically a parody. Marianne, the heroine of sensibility, makes nothing of social conventions and practical considerations and is miserably betrayed by her lover who, she trusted, fully shared her sensibility but chose to marry a richer woman for money. She is barely saved from madness and death by her sister Elinor whose "sense" or cool-headed judgment never fails her. What characterizes Elinor is not rigid reason but a sense of balance between the individual needs and the demands of the society——what in a more general sense could be called "common sense". Even so, if we look beneath the story at the tension, pain, irresolution and sense of loss and of guilt, which strikes Elinor no less than Marianne, we begin to see the novel as a fuller discussion or questioning of the very ideas of "sense" and "sensibility".